

ドイツ語の否定詞；kein と nicht についての一考察

島 浦 一 博

1. はじめに

日本人学習者にとって外国語はいかなる外国語であれ難しいが、ドイツ語の場合は、かなりドイツ語ができるようになって、否定詞 *kein* や *nicht* を用いた否定表現をうまく使いこなせないと悩んでいる人が多いように思われる。

その理由を一言で説明することは難しいが、一つにはドイツ語には否定表現が実に豊富で、それを表現する手段も多様であるということが挙げられるだろう。それに加えてもっとも一般的な否定詞といわれる *kein* や *nicht* にしても使いこなすのはなかなか容易ではない。多くの要素が複雑にかつ微妙に絡み合っているため、否定詞についての知識だけでは不十分だからである。また、日本語とドイツ語では否定についての考え方が大きく異なっているところがあり、否定詞によって何がどのように否定されているのかということが日本人学習者にはなかなか理解できないことも多い。

ドイツ語の否定表現はややもすると単純な印象を与えるが、しかし学べば学ぶほどその奥深さが次第に明らかになっていくような独得の性格を有している。

ある状況のもとである否定の意味を表していた文であっても、状況が少し変化しただけで、文自体は同じであってもその否定の意味が変わってしまうということは珍しくない。日本人学習者にとってドイツ語の否定表現はカメレオンのようにその意味合いを変化させていくような趣がある。

このようなドイツ語の否定表現の全体像を理解するには、否定詞の使用につ

いての詳細な規則が必要であるばかりでなく、同時にその表現を生み出す発想についての説明も必要であると思われる。しかしドイツ語の教科書をひもといってみても否定文を作るための規則に関する詳しい説明もその否定文を作る際のドイツ語的発想についての説明もほとんど見当たらない。たいていは kein と nicht の使い分けに関して「不定冠詞のついた名詞または無冠詞の名詞を否定する場合には、kein を用い、それ以外の場合には nicht を用いる」といった程度の簡単な記述にとどまっている。また nicht による否定にしても、文中における nicht の位置の違いによって全文否定と部分否定の区別がなされるといった記述に終始しているものが多い。

確かに否定詞 kein と nicht の使い分けの規則はシンプルで、導入としてはとても理解しやすいというメリットがある。しかし、それから先へ進もうとすると次々と壁が立ちはだかる。

例えば、上記の規則によると否定詞 kein と nicht は、それぞれ棲み分けがきちんとなされて、お互いが混じり合わないようになっているが、それにもかかわらず日常生活の場においては、kein による否定も nicht による否定もどちらも可能な場合がしばしば見出される。そしてその場合、どちらで否定しても意味が変化しないこともあるが、大きく異なることも多い。

このようなことを考え合わせてみると、否定詞 kein や nicht による否定表現を正しく使うためには、上記の規則を拡張して、両者の流動的側面についても理解を深める必要がでてくる。つまり kein や nicht を使って否定文を作る場合、1) kein による否定と 2) nicht による否定だけでなく、さらに 3) kein または nicht による否定についても考える必要があるということになる。最後のケースでは、意味が大きく異なることがあるので、特に注意が必要である。

ところで、kein と nicht のどちらでも否定文を作ることができるのはどうしてなのだろうか。このあたりの事情について、以下において考察してみよう。

〈私は日本人だ〉ということドイツ語では Ich bin Japaner. と表現するが、その否定形である〈私は日本人ではない〉については次のような二通りの表現

が可能であるといわれる。

(1) Ich bin kein Japaner. (私は日本人ではない)

(2) Ich bin nicht Japaner. (同上)

文の意味は、例文(1)の場合も例文(2)の場合もほとんど変わらないといわれる。例文(1)では kein を用いて否定しているが、これは先に見た kein と nicht の使い分けの規則に従って、無冠詞の名詞を否定するので kein を用いている。〈私は日本人だ〉ということを表示するとき、Japaner という名詞は無冠詞で用いられているが、ドイツ語では国籍を表す名詞は冠詞を付さないで用いる。

それに対して、例文(2)は nicht によって否定されている。これは先ほどの規則に反しているようにみえるが、必ずしもそうではない。確かに Japaner という語は大文字で書かれていることから分かるように名詞であり、その前に冠詞はついていない。しかし、ここで問題となっているのはその無冠詞の名詞が名詞として文中で独立しているのかどうかなのである。例文(1)では、この語が無冠詞の名詞として独立している(と判断されている)ために、kein によって否定されているが、例文(2)では無冠詞の名詞である Japaner を独立した名詞と考えるのではなく、名詞と動詞の sein が強く結びついたものとして、つまり、一種の分離動詞のように捉えているために、nicht によって否定されているのである。

無冠詞の名詞が、文中で名詞として独立しているのか、あるいは名詞の姿をしていても、すでに名詞としての実質をなくしており、動詞の要素の一部と化しているのかについては、ネイティブスピーカーの間でも判断が分かれることがある。kein と nicht の使い分け一つとっても容易ではないということは、このことから十分うかがわれるであろう。

さて、もう一度例文に戻ると、例文(1)も例文(2)もほぼ同じ意味を表しているが、ニュアンスとしては少し異なっている。例文(1)は、〈私は日本人ではない〉

という言い切りのニュアンスであるが、例文(2)は、文の後にまだなにかが続くようなニュアンスが感じられる。

(3) Ich bin nicht Japaner, (sondern Koreaner).

(私は日本人ではなくて、〈韓国産です〉)

例文(3)にみられるように、nicht による否定には修正的なニュアンスが潜在的に含まれている。

それに対して kein による否定は、直後の名詞を完全に消去して、ゼロにしてしまうような否定であるので、例文(1)では、〈私は日本人ではない〉という意味だけでなく、〈私は日本人なんかじゃない〉といった強い否定のニュアンスが生まれることもある。その場合は否定詞 kein にアクセントが置かれる。

無冠詞の名詞が国籍を表している場合は、kein を用いても nicht を用いても意味に大きな違いは生じないので、使い分けにそれほどこだわる必要はないにしても、kein と nicht の両方で否定文を作ることができる場合は、以下において検討するように、一般にその否定の意味するところがしばしば大きく異なる。特に日本人学習者の場合、その違いをきちんと理解することが kein と nicht の正しい運用のためには不可欠である。

本稿では kein と nicht のどちらも使えるような場合をいくつか取り上げて、特に kein の特徴をはっきりさせることを試みる。kein の特徴を明確に把握することは、ドイツ語の多様な否定表現の理解と正しい運用への道をひらくことに寄与するとともに、そのことはまた否定表現における nicht の特徴も明らかにすることになると思われる。

2. kein による否定の特徴

2-1. 無冠詞名詞の否定(1)

(4) Ich spreche **kein** Deutsch. (ドイツ語は全く話せない)

(5) Ich spreche **nicht** Deutsch. (私はドイツ語を使わない)

(6) Ich spreche **nicht** Deutsch, **sondern** Japanisch.

(私はドイツ語ではなくて日本語を使う)

例文(4)は、ドイツ語が話せるかどうかといったことが話題になっているときに、〈全く話せない〉ということ伝える際の表現であるが、ここには kein による否定の特徴がよくでていように思われる。つまり kein という語がつくと、その直後にある名詞の内容が無になって、何もかもなくなってしまうような印象を与える。

それに対して例文(5)は nicht を用いて否定しているが、kein も nicht も同じ否定の意味をもつ語であるにもかかわらず、その意味はかなり異なっている。ここでは例文(4)の場合と違って、〈ドイツ語が話せない〉ということの意味しているわけではない。例文(5)は、ドイツ語は話せるけれども何らかの理由でドイツ語は使わないといった状況を表している。例えば、国際会議などでドイツ語を使うかどうか問題になった場合などを思い浮かべることができるかもしれない。このように nicht による否定は当座(今・現在)のことに関わる傾向が強い。

また、nicht による否定においては、nicht によって何が否定されているかが判然としないというケースがある。例文(5)の場合は、Deutsch sprechen(ドイツ語を話す)が否定されているとも、Deutsch(ドイツ語)だけが否定されているとも解釈可能である。前者の場合は全文否定、後者の場合は部分否定と呼ばれる。nicht による否定の場合は、文中における nicht の位置によって全文否定

と部分否定の区別がなされるが、文によっては、nicht の位置が一つの個所に固定されてしまい、その文中における位置からだけでは全文否定なのか部分否定なのかを区別できない場合が発生する。例文(5)はまさにそのようなケースである。日常会話であれば、アクセントやイントネーションなどによってその違いを明らかにすることも可能であるが、書き言葉の場合には前後関係などから明らかにすることができなければ、正確な区別は難しい。

いま述べたように、例文(5)はこのままでも部分否定として解釈することは可能であるが、例文(6)のように、文の後に sondern による訂正を続けることによってこの文が部分否定であるということをはっきりさせることができる。ただし、これは必ずしも義務的ということではない。このように nicht による否定には潜在的に〈訂正〉の力が働いていることが分かる。

これまでの説明でもある程度明らかになったように、kein と nicht はどちらも〈否定〉という意味特徴をもつ語でありながら、それらによって表される否定の様相はかなり異なっている。

2-2. 無冠詞名詞の否定(2)

(7) Ich trinke kein Bier. (ビールはまったく飲まない)

(8) Ich trinke heute kein Bier. (今日はビールは飲まない)

(9) Ich trinke heute nicht Bier.

(今日はビールは飲まない 〈他の飲み物を飲む〉)

例文(7)は、例文(1)と同じ構造で、そもそも全くビールは飲まないことを表している。ここにみられるように kein による否定には〈一般的・普遍的〉性格が備わっている。ただし、例文(8)のように、heute (今日)などの言葉があると、普段はビールを飲むが今日は一滴も飲まないということを表示することも可能である。ここでは kein Bier という一般的否定が heute という時の副詞により

限定された否定となっている。例文(9)のように、kein ではなく nicht で否定すると、普段はビールを飲むという点においては例文(8)と共通であるが、今日はビールを飲まないで他のものを飲むという点で異なっている。この例文(9)では、例文(6)にみられるような sondern 以下の語は明示されていないが、ここにおいても nicht による〈訂正〉機能が働いているために、〈他の飲み物を飲む〉という意味が生まれていると理解することができる。

2-3. 不定冠詞のついた名詞の否定

- (7) Ich habe kein Auto. (私は車をもっていない)
- (8) Das ist kein Auto. (これは車ではない)
- (9) Ein Auto habe ich nicht. (車ならもっていない)

kein と nicht の使い分けの規則によると、kein は無冠詞の名詞を否定するだけでなく、不定冠詞のついた名詞も否定する。例文(7)は、Ich habe ein Auto. (私は車をもっている)という不定冠詞のついた名詞を伴う文の否定形と考えることができる。kein はここでは ein Auto という不定冠詞のついた名詞を否定している。もう少し詳しく言うと、ein Auto という全体を否定しつつも、kein の否定の焦点は不定冠詞の ein にある。この不定冠詞はここでは〈ひとつの〉という数的な側面を示しているが、例文(7)ではこの側面が kein によって否定されて、1→0になったことを表している。このことにより、0台の車をもつ、つまり車をもっていないという意味が理解できる。

ところで、kein が不定冠詞のついた名詞を否定する場合には、いつも不定冠詞に否定の焦点があるかといえば、必ずしもそうではない。例文(7)の Das ist kein Auto. は、Das ist ein Auto. (これは車である) の ein Auto を否定したものと考えることができるが、ここでの kein は不定冠詞の ein にというよりは、名詞の Auto に否定の焦点がある。つまり、ここでは指示された対象が車で

あるのかそうでないのかが問題になっているのであり、数が問題になっているわけではないからである。

このように kein が不定冠詞のついた名詞を否定する場合、不定冠詞に焦点をあてて否定する場合と名詞の方に焦点をあてて否定する場合があることを押さえておくことは、kein の否定の特徴を理解する上でとても重要である。

ところで、一般に kein によって否定される文は、nicht による否定文に書き換えることができ、その際、両者の文の意味は変化しないことが多いといわれている。例文(7)は否定の対象である ein Auto を文頭におけば、例文(9)のように nicht によっても否定することが可能となる。しかし、たとえ意味的にはほぼ同じであっても、例文(7)と例文(9)では、単語の並びが異なっているので、その発話状況には注意が必要である。

例文(9)の場合、ein Auto で文が始まっているので、つまり主語以外のものが文頭に置かれているので、その語は少し強く発音される。このような発話が出てくるための条件として、直前の会話に、「(当然のような口ぶりで) 車もっていますよね」といったやりとりの存在を思い浮かべることができるだろう。

つまり、例文(7)と例文(9)は、意味的に大きな違いはないにもかかわらず、状況による使い分けがなされているということがわかる。このようなことは否定表現に限ったことではないが、kein や nicht による否定表現を適切に使いこなすためには、どのような状況での発話なのかということを常に意識することが必要である。

2-4. 職業を表す無冠詞名詞の否定

無冠詞の名詞が職業を表している場合も、次のように kein と nicht の両方による否定が可能だといわれている。

(10) Er ist kein Arzt.

i (彼 (の職業) は医者ではない)

ii (彼は医者などと言えたものではない)

(1) Er ist nicht Arzt.

(彼 (の職業) は医者ではない)

kein と nicht のどちらで否定しても、〈彼 (の職業) は医者ではない〉という意味を表すことができるといわれているが、kein で否定する場合には必ずしも一義的な意味にならず、その他に、〈彼は医者などと言えたものではない〉といった意味を表すことがある。前者が職業としての医者を否定しているのに対して、後者は彼が医者であることを否定しているわけではない。それではここでの kein は何を否定しているのだろうか。

このことを理解するために、例文(10)の肯定の形を考えてみよう。すると、次のような二つの肯定文が導かれる。

Er ist kein Arzt. → (1) Er ist Arzt.

(2) Er ist ein Arzt.

つまり、Er ist kein Arzt. という文は、Er ist Arzt. を否定した形であると同時に、Er ist ein Arzt. を否定した形でもあることが分かる。

〈彼 (の職業) は医者ではない〉という意味は、(1)の文の無冠詞名詞 Arzt を否定したことによって生まれているが、〈彼は医者などと言えたものではない〉という意味は、(2)の文の ein Arzt を否定したことによって生まれている。この否定される ein Arzt は不定冠詞 ein と名詞 Arzt からできているが、この場合の kein は ein Arzt を一体のものとして否定しつつも、不定冠詞に否定の焦点をあてている。例文(7)では不定冠詞によって示唆される数的な側面が否定されていたが、ここでは不定冠詞によって示唆される〈性質的な〉側面に否定の焦点があてられている。

ein Arzt は、もちろん、たくさんいる医者の中の一人ということを表すこともできるが、このままでも、腕のいい医者とか、へぼ医者とか、その他様々な意味を含みとしてみてもっており、ここでの kein はこういった性質を示唆する不

定冠詞に焦点をあてて否定していると考えることができる。

ただ、このように考えるのは煩雑なので、この場合の kein は、医者という職業が喚起するイメージと現実が一致していないことを示して、〈彼は医者などと言えたものではない〉といったニュアンスを表現していると考えられるだろう。ここでの話し手は医者という職業について確固たるイメージを有しており、そのイメージが現実の彼と一致していないことを示している。

(12) Er ist kein Schauspieler. (彼には人を騙すような演技はできない)

(13) Er ist nicht Schauspieler. (彼の職業は俳優ではない)

同じ職業であっても、「俳優」などの場合には、例文(10)のようなケースとはさらに異なる事態がみられる。例文(12)は、i) 「彼 (の職業) は俳優ではない」、ii) 「彼は俳優などとはいえない」という意味に加え、iii) 「彼には演技(何かを装って人を欺いたりすること)はできない」といった比喩的なニュアンスを表すこともある。

例えば、テレビでサッカーの試合を観戦していて、サッカー選手が倒れたりすると、本当にファールがあったのか、それとも演技なのかちょっと分からないときがある。日頃からまじめなプレーで知られている選手がうずくまったりすれば、〈あれは本当に痛いんだよ、彼は演技ができるような選手じゃないから〉という声がテレビの前からもれるだろう。例文(12)は、そのような状況を説明する際の例として思い浮かべることができるかもしれない。

2-5. 数詞+無冠詞名詞の否定

(14) Das kostet nicht fünf Euro. (これは5ユーロではない)

(15) Das kostet keine fünf Euro. (これは5ユーロもしない)

(16) Das kostet nicht einmal fünf Euro. (同上)

(17) Es sind **nicht** drei Linden stehengeblieben.

(残っている菩提樹は3本ではない/残っているのは3本の菩提樹じゃない)

(18) Es sind **keine** drei Linden stehengeblieben.

(残っている菩提樹は3本以下である)

数詞+無冠詞名詞を含む文も、kein と nicht のいずれによっても否定することが可能であるが、この場合両者の意味は大きく異なる。nicht で否定した場合、問題となっている対象の値段が5ユーロではないことを示している。例文(14)の場合、実際の値段は5ユーロより安い可能性も、高い可能性もありえる。それに対して、例文(15)のように、nicht ではなく kein を使って否定した場合、kein は fünf Euro という語句を否定しつつ、否定の焦点は数字の「5」にある。kein によって〈ひとつ〉ということを示唆する不定冠詞が否定されると1→0のような変化が生じたが、kein によって数詞が否定されるときには当該の数字が0になることはなく、当該の数字より少ない数を意味する。

ところで kein のこのような働きについては、まだ十分に解き明かすことができていないが、このことについては「kein は無冠詞の名詞を否定する」という規則を少し拡張して、形容詞+無冠詞名詞の否定のバリエーションとして考えてみることも可能であるかもしれない。ちなみに例文(14)に einmal という語を付け加えて、例文(16)のように nicht einmal とすると、ほとんど例文(15)と同じような意味を表すことができる。

このことについてもう少し補足しておけば、例文(17)では、nicht は数詞の drei のみを否定する場合と drei Linden (3本の菩提樹)を否定する場合があるとされ、例文(18)のように kein で否定されると「3本以下の菩提樹」があるという意味にしかないとの報告がある。

2-6. 無冠詞名詞と動詞からなる熟語の否定

- (19) Sie brauchen **keine** Angst zu haben. (全く心配要らない)
(20) Sie brauchen **nicht** Angst zu haben. (怖がる必要はない)

無冠詞名詞と動詞からなる熟語については、名詞部分が4格目的語の性格が強い場合は **kein**、分離前つづりの要素が強い場合には **nicht** を用いて否定すると言われている。すでに述べたように、このあたりの判断は人によって異なることも多い。その結果、両者の境界はしばしば流動的であるが、次の例にみるように、両者の特徴はそのような場合であってもはっきり出ているように思われる。

例文(19)では、**kein** は直後の名詞 **Angst** (不安) をゼロの状態にしているために、〈心配いらぬ〉という意味を表し、それに対して例文(20)の **nicht** は **Angst haben** (怖がる) を否定することにより、〈怖がることはない〉という意味を表している。

2-7. 前置詞を伴った無冠詞名詞と動詞からなる述語の否定

- (21) Dieses Thema ist für den Umweltschutz von **keiner** großen Bedeutung. (このテーマは環境保護にとって大きな意味はない)
(22) Dieses Thema ist für den Umweltschutz **nicht** von großer Bedeutung. (このテーマは環境保護にとってあまりたいした意味はない)

前置詞を伴った無冠詞名詞と動詞からなる述語のうち、名詞部分の独立性が強い場合、**kein** で否定するが、この場合は **nicht** において否定することも可能であるといわれる。ただし、その場合には意味が微妙に異なる。

例文(21)では **kein** を使って否定しているので、否定の対象は直後の **großen**

Bedeutung となる。つまり、この文では、「このテーマ」が環境保護にとって「大きな意味」をもっているかどうか焦点をあてた表現となっていることが分かる。要するに、この文の発話者の頭の中には環境保護にとって大きな意味をもつものがすでに存在しており、それとの比較において、「このテーマは大きな意味を持っていない」ということを表していることになる。それに対して例文(23)は、nicht を使って否定しているので、否定の対象は von großer Bedeutung sein ということになるが、否定の焦点は groß にある。つまり、環境保護にとって「このテーマに意味があることは認めるが、その意味は大きくない」ということを意味する。

ただ、名詞的規模が大きくなっていくと、kein や nicht によって何が否定されているのか次第に不明確になっていくため、他の手段、例えばアクセントなどの助けを借りて、否定されている個所を明確にする必要が生まれてくるように思われる。このような kein と nicht の使い分けによる意味の違いをきちんと理解することはなかなか容易ではない。

(23) Ich habe keine Absicht, ihn zu besuchen. (彼を訪ねるつもりはない)

(24) Ich habe nicht die Absicht, ihn zu besuchen.

(彼を訪ねるつもりなんてまったくない)

例文(23)のような文が発話されるには、その前に「あなたは彼を訪ねますか？」(Werden Sie ihn besuchen?) といった質問が想定され、例文(23)はそういった質問に対する一般的な否定表現で、彼を訪ねることについて、特別な思いを抱いているわけではないということを表している。それに対して、例文(24)が発話される状況の前提としては、「彼はあなたが訪ねてくることを期待していますよ」とか、「あなたは彼を訪ねたほうがいいですよ」(Sie sollten ihn besuchen, glaube ich.) といった状況が想定される。このような状況で例文(24)が発話されると、「どんなことがあっても行くつもりはない」といった強い拒否の意志を表

すといわれる。このような場合、通常 nicht に強いアクセントが置かれる。

つまり、質問やアドバイスの状況によって、kein による否定となったり、nicht による否定となったりするというのであるが、このようなケースになるとこれまで説明してきた kein と nicht についての考え方だけでは十分に説明できないように思われる。kein と nicht の使い分けの規則をさらに拡張することによってこのような事態の説明が可能となるのか、あるいは新たな概念を導入する必要があるのかは現時点では判断ができないが、このような否定詞の使い方については今後も文例の収集を行い、改めて分析を試みたいと思う。

3. ま と め

ドイツ語の否定表現は実に豊富で、その表現の可能性も変化に富んでいるために、日本人学習者がドイツ語の否定表現を自由に使いこなすには、かなりの練習とドイツ語の否定についての考え方の理解を深める必要がある。本稿ではそのためのささやかな試みとして、代表的な否定詞である kein と nicht の両方による否定が可能なケースをいくつか取り上げ、kein と nicht の否定の特徴を明らかにすることにより、ドイツ語における否定の発想の一端を明らかにするように努めた。確かにドイツ語の否定表現は複雑であるが、kein と nicht の否定の特徴をしっかりと理解することができれば、その複雑さもかなり単純化できるのではないかと思われる。

ここまで述べてきたことを要約すると次の通りである。

- 1) kein も nicht も「否定」の意味特徴を持つということでは共通しているが、kein と nicht の両方による否定が可能な場合には、文意が異なってくる場合が多い。
- 2) kein と nicht の両方による否定が可能な場合、kein は直後の名詞の意味内容を何らかの意味で消去し、nicht は潜在的に「訂正」の機能を有している。

- 3) また、kein による否定は一般的・原則的なことに関わり、nicht による否定は当座のこと（今・現在）に関わる傾向がある。
- 4) kein が不定冠詞の付いた名詞を否定する場合、kein は名詞全体を否定しつつも、不定冠詞に焦点をあてて否定する場合と名詞に焦点をあてて否定する場合がある。
- 5) kein が不定冠詞に焦点をあてて否定する場合、
 - ①不定冠詞によって示唆される数的な側面を否定する。
 - ②不定冠詞によって示唆される性質的な側面を否定する。
- 6) kein による否定にせよ、nicht による否定にせよ、否定される対象規模が大きくなると否定の焦点が不明瞭になりやすくなるため、アクセントなどの補助的手段が必要となる。
- 7) kein と nicht をただしく使い分けるには、形式的なルールを理解するだけでなく、常に具体的な状況の中で考える習慣を身につける。

参考文献

- Duden Bd. 4 (1995): *Grammatik*.
- Helbig, G. / Buscha, J. (1998): *Übungsgrammatik Deutsch*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.
- Helbig, G. / Buscha, J. (1988): *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Hall, K. / Scheiner, B. (2009): *Übungsgrammatik: Daf für Fortgeschrittene*. Ismaning: Max Hueber Verlag.
- Stikel, G. (1970): *Untersuchungen zur Negation im heutigen Deutsch*. Braunschweig: vieweg.
- 関口存男：『冠詞』三修社（1974）
- 岩崎英二郎：『ドイツ語副詞辞典』白水社（1998）
- 井口 靖：『ドイツ語の否定について』（<http://www.human.mie-u.ac.jp/~inokuchi/german/invitation/language/negation.html>）

付記：本稿は、第62回日本独文学会西日本支部研究発表会（長崎ニュータンドホテル・2010年12月4日）において口頭発表した内容を加筆修正したものである。また、本稿は日本学術振興会平成21年度～平成23年度科学研究費補助金〔研究課題名：日本人学習者のためのドイツ語の否定表現研究、研究番号21520589〕の交付を受けて行った研究成果の一部である。